



令和2年度研究助成 【音楽振興部門】より

コーカサス諸民族の伝承歌謡に関する体系的な研究

大阪大学 文学研究科 音楽学研究室

招へい研究員

久岡 加枝

黒海とカスピ海の間位置し、ヨーロッパとアジアを跨ぐコーカサス地方にはさまざまな民族が暮らす。興味深いことに、言語や宗教を異にする彼らの間には、多声部合唱（以下合唱）をはじめ、撥弦・擦弦楽器、舞踊など共通する音楽文化が広まっている。筆者はこれまで、グルジア人の音楽を研究してきたが、今後は類似する音楽的特徴を持つアドゥイゲ人などの北コーカサスの民族の音楽に研究対象を広げていきたいと考えている。

1. コーカサスの音楽との出会い

筆者がコーカサス諸民族の音楽文化に興味を持ったきっかけは、大学時代にロシアに留学した際に、都市部のレストランでグルジア料理やレズギンカなどのコーカサス地方の音楽や舞踊を目の当たりにする機会があり、ロシア社会において、こうした異民族の文化がむしろロシア料理やロシア民謡よりも際立った印象を持つように感じたからである。ロシアにおいてこうした非ロシア人の文化が一定の存在感を持つようになった背景には、ソ連時代に推進された非ロシア系諸民族の文化の発展を重視した政策が影響を与えていることを後に知るのだが、いずれにせよ、非ロシア人の文化に異国趣味的な価値を見出す傾向は、ソ連期以前から作曲家や作家などのロシア人

の知識人階級に存在したことは事実だ。よく知られるように、M・バラキレフ（1837-1910）の『イスラメイ』（1870）やS・リャプノフ（1859-1924）の『レズギンカ』（1903）などの19世紀のロシア音楽の名作の中には、コーカサス地方の民謡を題材としたものが多い。

筆者はその後、ジョージアのトビリシ国立音楽院に留学し、ユネスコの世界無形文化遺産に登録される合唱などの伝承歌謡が、民間で実際にどのように歌い継がれてきたのか、参与観察から明らかにする機会を得た。グルジア人の伝承歌謡の歌い手やその研究者は、口をそろえて、合唱が民族の歴史と等しい太古に起源を持ち、グルジア人の智慧を反映した精神文化であることを誇る。また、グルジア出身の音楽学者ジョセフ・ジョルダニア氏が主張する、集団で「うた」を歌う習慣が、何らかの敵を威嚇する目的で、人類の祖先の間にすでに定着していたという仮説も現地では影響力を持ち、グルジア文化としての合唱の古い歴史を裏付けている。合唱の起源に関してはジョセフ・ジョルダニア著、森田稔訳『人はなぜ歌うのか？人類の進化における「うた」の起源』（アルク出版、2017年）を参照されたい。

中世グルジアの宗教文献に「ムザフル Mzakhr、ジル Jir、バム Bam」といった合唱の三声部を意味する概念が確認できるように、グ

ルジア人の合唱が古い歴史を持つことは事実である。一方で筆者は、合唱がグルジアのさまざまな地域集団や社会階層の人々の間に民族文化として根付いていった背景には、19世紀以降にロシア帝国の支配下で発展した民族意識の影響もあるのではないかと考えている。

現在のグルジア文化に対する近代の民族意識の影響を重視する筆者の意見は、合唱の古さに価値を見出す立場の現地の研究者に受け入れられることはなく、留学中はどこか居心地が悪い思いをしたのも事実である。一方で、民族の正統な文化としての合唱をめぐる語りが影響力を持つ現状を受け入れたうえで、こうした語りが社会階層や地域集団、ジェンダー認識を異にする人々にいかに影響を与え、オルタナティブな文化をめぐる語りが生成されてきたのかを明らかにする必要があるのではないかと感じた。

またトビリシ音楽院が主催する国際学会 International Symposium on Traditional Polyphonyへの参加を通じて、合唱がジョージアだけでなく、アドゥイゲ共和国などのロシア連邦内の北コーカサスの諸民族が暮らす地域においても主要な音楽文化である現状を知り、グルジア人の合唱とのジャンルや音楽的特徴の違いや共通性について明らかにし、さらに北コーカサスで合唱は民族文化としていかに位置付けられているのか研究したいという思いを抱くようになった。グルジア人の音楽文化に関しては、

近刊の久岡加枝著『グルジア民謡概説：謡に映る人と文化』（スタイルノート、2020年）を参照されたい。

2. なぜコーカサスの音楽を研究するのか

唐突かもしれないが、筆者は、コーカサスの音楽文化には、古代から中世期にシルク・ロードを経て中国大陸から日本へ伝わり、「散楽」や「田楽」として知られるようになった我々にとって身近な歌舞音曲のルーツがあるのではないかと考えている。例えばコーカサス北西部に暮らすアドゥイゲ人の舞踊の伴奏には、Pkhatsichプハツィチと呼ばれる木製の打楽器



写真1 打楽器プハツィチ

〔出典〕 Alla Sokolova “History and Theory of the Adyghian Clappers,” <http://www.circassianworld.com/pdf/Sokolova-pkhachich.pdf>

が用いられるが、どこか日本の「こきりこ」や「びんざさら」を思わせる形状を持つ(写真1)。また、コーカサス北東部のダゲスタンでは、管楽器ズルナの伴奏と共に行われるアクロバティックな綱渡り芸が盛んであるが、日本においても千葉県は無形民俗文化財に指定される「つく舞」と呼ばれる笛や太鼓の伴奏と共に行われる綱渡り芸が知られる。コーカサス地方の音楽文化は、日本から遠く離れた存在である一方で、どこか我々の文化的ルーツを感じさせる貴重な存在でもある。

また、コーカサス諸民族の伝承歌謡や舞踊は、勇猛果敢な男性と、繊細で優美な女性といった古典的なジェンダーのパターンを服装やしぐさによって強調したものが多いが、多様なジェンダーのあり方が主張される現在において、ステレオタイプなジェンダー表現を扱った筆者の研

究は、どこか物足りない存在かもしれない。客室乗務員の女性の間でハイヒールが履かれなくなり、男性の間でも化粧が施される現代社会において、ジェンダー間の差異は曖昧なものになっていくだろう。こうした新たな時代背景の中で、コーカサスの音楽や舞踊のような古典的なジェンダーを表現した芸能は、貴重な価値を持つようになると考えられる。

コーカサス諸民族の伝承歌謡の歌詞や旋律、ジャンルの概要を明らかにする筆者の研究には、よりグローバルな視野から、あるいはより内在的な視点から批判が寄せられるかもしれない。しかしながら、日本人にとってまだまだ馴染みのない地域の文化に関する基本情報を日本語で発信していくことは、今後、ジョージアなどのコーカサス地域の人々と関わりを持つ可能性のある日本の若い人々の手引きとなる役割を果たすと考えられる。